

いろいろなことを教えてくれる子どもたち ②

村石京子

とうもろこしやさん

私たちの幼稚園の園庭は二つの部分で出来ていて、
保育室から見通せる場所は「お庭」、少し小高くなっ
たところにあるのは「お山」、と子どもたちは区別し
て呼んでいます。今回はその中で「お山」の遊びを通
して書いていきたいと思います。

私たちも保育者の眼から見ると、この山での遊び方は
保育室や庭での遊びとは一味違つて、日だまりの中で
ゆつたりと三々五々展開されているのが感じられます。
春はタンポポやシロツメグサの花をつんだり、秋

「お山」には樹令百年にもなるうとする巨大な銀杏
の樹がそびえており、その下は一面の雑草園となつて
います。そこでは子どもたちは、草とりや虫とりなど

は大公孫樹の落としてくれる銀杏の実や山の小道の椎の実拾い、色づいた紅葉を集めたり、枝もたわわな柿の実を眺めながらその味を期待している子どもたち、この山の遊び場は現代の子どもたちの得がたい自然からの贈り物を四季折々に与えてくれるところとして、大事な保育の役割を担ってくれる場所となっています。

ところで私たちの幼稚園では、日常の保育の中では

立割り学級とか、異年令集団ということを意図的に構成してはおりませんが、種々の遊びを通して自然の成り行きの中で年令の異なる子どもたちが交わって遊ぶことがよくあります。お店屋さんごっこ、劇あそび、その他いろいろなごっこ遊びでは夫々の年令によつて夫々の役割をとつて交流しあうことが多くあります。また何気なくはじまつた遊びの中にも年令の異なつた子どもたちの接觸は不斷にみられています。三才児、四才児はいろいろな遊びを五才児から教えてもらって、遊び方やその面白さを知ることを経験し、次に

は自分達でその遊びをやり出して遊びのレパートリーを広げていきますし、年長組の子どもは小さい子どもに対するいたわりや優しさを身につけ、あるいは遊びの中でのリーダーシップを体験したりしています。こうした遊びを通して覚えたり、学んでいたりすることは教師が指導するものとは異なった意味あいで、子どもの心の中に深く残され育つていくものとなつてゐると思ひます。

今日は山では丸太の上で三才児の三、四人が一軒のお店を開いています。芝の伸びてかさかさに枯れたものを丸めて焼きそばにして遊んでいます。枯れ芝から焼きそばというその柔軟な発想は、子どもは遊びを楽しむする名人として、その思いつきの素敵さを私に教えてくれます。「焼きそば一ちょう出来ました。」という呼び声で入れかわつてお客様さんも来て葉っぱのお金をわたしています。「すぐ出来ますからお待ち下さい。」などという一人前のやりとりが聞こえてくると面白そだなと思つたのか、虫とりをしていた五才児の男の

子もお店をのぞいてくれるので、焼きそばやさんははりきっています。それを見てはじめはお客さんになつていた三才児のR男はお店びらきをしたくなりました。

別の丸太のところですぐにもう一軒のお店が出来ました。「どうもろこしやでーす。」「どうもろこし出来ました。ねエ、先生来て。」と呼ばれていくと、あら、まあ、本当に!! 真直ぐに伸びたおおばこの花はミニとうもろこしそっくりです。私はここでまたおおばこの花をどうもろこしに例えるその連想に嬉しくなつてしましました。大人の眼からは見つけられない類似性です。「本当、どうもろこしそっくりね。一本おいくらいですか?」「百円です。」「おいしく焼けましたね。」と会話をかわしていると先程の五才児が二人、こちらのお店ものぞいてくれました。そして「どうもろこし下さい。」と三才児のお店やから買つたあと、私の傍へ来てそうっと言ったのです。「ねエこれ、どうもろこしに

似てるけど、本当はこれはとうもろこしじゃなくて、おすもう草っていう名前の草なんだよ。」成る程、長く伸びた二本の草を真中でからんで互にひっぱりあって遊ぶすもう遊びに使われるものです。私は一本の草に子どもの遊びに応じて名づけられる呼び方を改めて思い起こすと同時に、おすもう草と呼んでいる五才児が、でも一生懸命遊んでいるとうもろこしやさんの遊びをこわさないように、三才児の表現を否定しないでいる心づかいを見ました。

子ども自身で考えだしていく遊びには、小さなものにも新しい創造があり、それをお互に味わいつつ、相手の遊びを生かしていくことで遊びを通して育つていくもの、人間としての成長があることを学んだものでした。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)